

ลมจากกรุงเทพฯ バンコクの風



JSPS
BANGKOK
NEWSLETTER
2014-15 Vol.3

Wat Nong Wang Muang
Khon Kaen, Thailand



JSPS BANGKOK CONTENTS

JSPS事業説明会の実施	01	センター活動記録	19
バンコク研究連絡センターの参加イベント	06	コラム	20
JSPS同窓会情報	11	学術情報 (2014年10月－12月)	22
特集「科学者を育てる学校 (サイエンス・スクール) づくりの試み (タイ)」在タイ日本国大使館 俵幸嗣	12		



センター長挨拶

新年あけましておめでとうございます。

「バンコクの風」2014年10-12月分をお届けします。JSPS バンコク研究連絡センターの活動報告であるこれをずっと読まれておられる方は、すぐにお気づきでしょうが、本号からデザインが刷新されました。今までのものに比べてレイアウトも記事の配置も分かりやすくなったのではないのでしょうか。

2014 年度は、バンコクセンターよく動きまわった一年間でした。タイ国内の主要な大学や研究機関を訪問し、JSPS のガイダンスセミナー実施すること、今年度（まだ 3 ヶ月を残してますが）、20 回を数え（昨年はその半分）、バングラデシュ、インドネシア、フィリピンでも実施しました。これが可能になったのも、バンコクセンターに最初の「国際協力員」（日本の大学の事務職員の研修を兼ねて 1 年間派遣する制度）として九州大学から轟裕美さんが赴任されたことで、センターの日常活動に余裕ができ、今までは「お招き」があってもそれに応えられなかったのができるようになったことや、こちらから大学や研究機関に働きかけができるようになったことが大きいです。「バンコクの風」の編集も轟さんにやってもらっています。また英語、日本語が堪能な優秀なタイ人スタッフ（今年前半は Bua さん、後半からは Bom さん）にも恵まれ、私や山田大輔副センター長を支えてくれています。忙しい日々でしたが、充実した 2014 年でした。皆様におかれては、本年も引き続きバンコクセンターへのご支援、ご協力お願い申し上げます。

2015 年 1 月吉日
JSPS バンコク研究連絡センター長 山下 邦明

JSPS 事業説明会の実施

バンコク研究連絡センターは、タイを中心に担当国の大学等高等教育や研究機関を訪問し、JSPS 事業説明会を行っています。当センターの訪れた機関の紹介と事業説明会の様子をお伝えします。

タイ・国立科学技術開発庁(NSTDA)・科学技術関連機関オフィス訪問 (10月16日)

NSTDA 内にオフィスを設置している東京工業大学タイオフィスの森村浩明拠点長にサポートいただき、初めて同機関で事業説明会を開催しました。

NSTDA は科学技術省所管の研究開発機関で、タイにおける科学技術の研究開発ハブとして研究資金や施設の提供から産学連携支援を行っています。

傘下に 4 つの国立研究所—タイ国立遺伝子生命工学研究センター (BIOTEC)、タイ国立金属材料技術研究センター (MTEC)、タイ国立電子コンピューター技術研究センター (NECTEC)、タイ国立ナノテクノロジー研究センター (NANOTEC)—が NSTDA と同じサイエンスパーク内に設置されています。これらの研究所を含め NSTDA では博士号取得者 500 名を含む 2,000 名近くの研究者が活動しています。



【左よりセンター長、Chadamas 筆頭副理事長、国際協力員、Patharaporn 国際事業部長、森村拠点長】



説明会には 80 名を越える参加者がありました。これまで JSPS 国際事業を活用した NSTDA との共同研究プロジェクトはほとんどなく、JSPS Fellowship 経験者も過去 3 名ですが、今後 JSPS 国際事業を活用して日本との学術交流が進むことが期待されます。

科学技術関連オフィス訪問

事業説明会後、サイエンスパーク内にオフィスを置く 4 つの科学技術関連機関を訪問しました。

東京工業大学タイオフィス

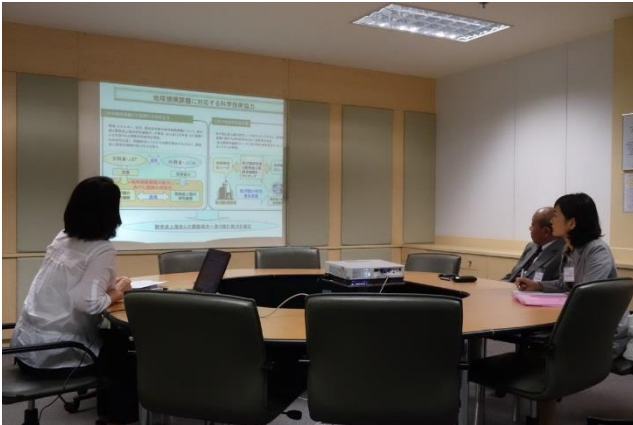
同大学は、NSTDA とタイの 4 大学と連携し大学院 (TAIST-TokyoTech) を NSTDA 内に設立し、タイの大学から派遣された学生に対して東工大から教員の派遣し、ものづくり人材の育成を行っています。授業は英語で行われ、学生は国際的な環境の中、少人数クラスで授業を受けることができます。同大学院から日本の大学の博士課程へ進学する学生も輩出しています。



【TAIST での授業の様子】

JSPS 事業説明会の実施

SATREPS「タイ・非食糧系バイオマスの輸送用燃料基盤技術プロジェクト」Director Office



JST と JICA が共同で実施している SATREPS 事業の「タイ・非食糧系バイオマスの輸送用燃料基盤技術プロジェクト」オフィスを訪問し、ラッセル加恵業務調整専門家より同プロジェクトについて説明いただきました。NSTDA も同プロジェクトに参加しています。ラッセル専門家は、今後タイは ODA で支援を受けるだけの国ではなく、日本から技術、タイから人材を提供し対等な共同研究パートナーになっていくだろうと話されました。

【プロジェクトの説明を行うラッセル専門家】

情報通信研究機構アジア連携センター

大西洋浩センター長、池末成明副センター長に業務概要や機能を説明いただきました。日本の情報通信分野の技術が世界でイニシアチブをとるために、同機構はアジアを中心に情報通信関連の国際会議出席や技術供与などを行っています。

また 2014 年 3 月のバングラデシュ JSPS 同窓会シンポジウムにおいて基調講演を勤めていただいた九州大学 Dr. Ashir Ahmed 准教授の研究を技術的な面で同機構がサポートされていたというお話も伺い、学術ネットワークが国や分野を越えてあらゆるところで構築されていることを認識しました。



【左から池田副センター長、山下センター長、轟国際協力員、池末センター長】

e-ASIA Joint Research Program (e-ASIA JRP)事務局



【左から岸田コーディネーター、センター長、国際協力員】

e-ASIA Joint Research Program とは東アジア地域の研究交流を促進し、地域の課題を解決するために、参加国がそれぞれの国の研究グループを支援する多国間共同研究プログラムです。タイでは NSTDA が同プログラムの参加機関であり、事務局の場所を提供しています。e-ASIA JRP 事務局には、科学技術振興機構（JST）から岸田絵里子プログラムコーディネーターが派遣されており、同プロジェクトの概要と今後の展望についてお話を伺いました。e-ASIA の活動は、JSPS の参加する ASIA HORCs（アジア学術機関長会議）とつながる部分も多く、当センターは今後も e-ASIA 事務局と積極的にアジアの学術情報の共有を図っていききたいと思います。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/10/16/2500/>)

在タイ日本大使館主催日本留学説明会で 3 大学にて事業説明会実施

在タイ日本大使館主催日本留学説明会

在タイ日本大使館が主催する地方留学説明会は年に四大学で実施されており、JSPS は 2012 年度より本格的に参加しています。2014 年は、ナレスワン大学、マハーサーラカーム大学、コンケン大学を日本大使館及び京都大学、東海大学、東京工業大学、福井工業大学、明治大学（五十音順）、日本学生支援機構（JASSO）とともに訪問しました。大使館と大学は学生を対象として留学説明会、JSPS バンコク研究連絡センターは研究者を対象に事業説明会を開催しました。

ナレスワン大学（11 月 6 日）

ナレスワン大学はタイ北部のピサヌローク県に位置する総合大学です。1967 年に教員養成大学として設立され、その後シーナカリン・ウィロート大学のピサヌローク・キャンパスとして再編、1990 年に単独のナレスワン大学として公式に設立されました。現在は 22 の学部等を有する総合大学としてタイ国内外で確固たる地位を築いています。同大学への訪問は 2012 年以来 2 年ぶりとなります。



【日本大使館、日本の大学、JASSO、JSPS による副学長表敬訪問】



【Ratchanee 准教授による講演】

小林茂紀参事官を代表とし、Rosarin Wongviarat 学術担当副学長を表敬訪問し、ナレスワン大学の国際教育プログラムの構築や日本との協定校との連携について意見交換を行いました。日本へ留学や研究経験のある同大学の教員も多数同席され、このうち Tawatchai Sumpradit 准教授は JSPS 拠点大学交流事業で以前、大阪大学で研究活動をされていました。

JSPS 事業説明会には研究者を中心に約 40 名が参加しました。国際事業説明のほか、3 人のナレスワン大学に所属する JSPS 同窓生にご登壇いただき、日本での研究経験をお話いただきました。

愛知大学で論博事業にて博士号を取得された経営情報科学部の Ratchanee Mukhjang 准教授よりご自身の経験をお話いただくとともに、若手研究者に JSPS 事業への申請を推奨していただきました。Ratchanee 准教授は今年愛知大学で博士号を取得され、2015 年 2 月 27 日に実施される論文博士号メダル授与式でも講演頂く予定です。外国人研究者招へい事業（短期）で九州大学や愛媛大学で研究された Siripong Premjet 准教授には、多くの写真を交えながら日本での経験をお話頂きました。また、同大学元日本留学生会長で論博事業で博士号を取得された Chantana Chanbanchong 准教授から閉会の御挨拶を頂きました。

ナレスワン大学での事業説明会は二年ぶりでしたが、最も大きな収穫は JSPS 同窓生に面識を得る機会があったことと言えます。タイ同窓会の活性化のためには、地方大学の同窓生の協力は欠かせません。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/11/06/2621/>)



また、Rojchai 准教授と同じ研究所に所属され、外国人研究者招聘事業（長期）にて高知大学で研究された Weerachai Sajjuntha 講師にも、日本の研究室の様子や研究者との交流をお話いただきました。

同大学での事業説明会は初めてでしたが、40 名近くの研究者が参加し、来年度の二国間交流事業申請に意欲をみせる研究者や、日本の受け入れ研究者へコンタクトをとる際のヒントが得られたというコメントが寄せられました。地方大学ではファンドの情報が十分でないことを実感し、地方で事業説明会を継続的に実施していくことの重要性を実感しました。

Copyright © JSPS Bangkok Office. All rights reserved.

タイ・カセサート大学農学部（11月3日）



【近藤教授による京都大学案内プレゼンテーション】

た。Dr. Suratwadee は、JSPS 論文博士号取得支援プログラムで京都大学大学院農学研究科で博士号を取得されています。セミナーは学部生、大学院生を中心に 40 名が参加しました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/11/03/2536/>)

タイ・科学技術研究所（TISTR）（12月17日）

TISTR は 1963 年に設立されたタイ科学技術省傘下の研究機関で社会の発展や商業化につながる研究開発を中心に行っています。

説明会の開催は TISTR と日頃より連携関係のある産業技術総合研究所の宮崎芳徳先生にご支援いただきました。

JSPS 国際事業の説明に続き、TISTR バイオサイエンス部門研究員の Dr. Aparat Mahakhant に「My experiences on Japanese Fellowships & Collaborations including JSPS」と題して講演いただきました。



【Dr. Aparat による講演】

自身もプロジェクト支援期間終了後も日本人研究者たちと息の長い連携をつづけていると語りました。Dr. Aparat は集まった 80 名ほどの若手研究者たちに対して、現状に満足せずぜひ JSPS の論博事業や外国人特別研究員事業に応募し日本で研鑽してほしいと力強く鼓舞されました。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/12/17/2701/>)



【左より国際協力員、山下センター長、Yongvut Saovapruk TISTR 長官、Dr. Aparat、宮崎先生】

Dr. Aparat は大阪大学で博士号を取得され、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）や国際協力機構（JICA）のバイオサイエンス分野の研究プロジェクトに参加してられました。

また、大阪大学生物工学国際交流センターが東南アジアの複数の大学と平成 7 年度から 16 年度に実施した JSPS 拠点大学交流事業課題「多様な熱帯生物資源の持続的利用に関するバイオテクノロジー分野における多国間共同研究」に参加されました。

Dr. Aparat は、TISTR には欧米の大学で学位を取得した研究者が多いが、日本の研究助成事業は欧米と比較して事業終了後のフォローアップに優れており、ご

バンコク研究連絡センターの参加イベント

バンコクでは、国際的な学術シンポジウムやイベントが数多く実施されており、当センターも積極的に参加し、ASEAN 地域の最先端の学術情報の収集に努めています。

e-ASIA Joint Research Program (e-ASIA JRP)事務局開所式 (10月21日)

e-ASIA JRP (プログラム概要は2頁参照)には、タイからは NSTDA が設立当初から同プログラムに参加し、今年よりタイ農学研究機構 (ADRA) も参加しました。

日本からは、科学技術振興機構 (JST) が参加し、小林治 JST シンガポール事務所長が e-ASIA JRP 事務局長を兼任、岸田絵里子調査員が e-ASIA JRP 事務局にプログラムコーディネーターとして派遣されています。NSTDA も事務局スペースと職員 1 名を提供しています。

開所式にて Thaweesak NSTDA 理事長は東アジアの共同研究プログラムの事務局を NSTDA に開設できたことへの喜びと、ARDA の参加により農業分野の共同研究が進むことに期待を示されました。

日本からは JST 伊藤宗太郎国際担当執行役、小林 JST シンガポール事務所長らが出席し、e-ASIA JRP は日本がイニシアチブをとって立ち上げ、JST が暫定的に e-ASIA 事務局の役割を担っていたが、今後は新 e-ASIA JRP 事務局を拠点に参加国間のネットワーク強化によりプログラムを発展させてほしいと述べました。



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2014/10/21/2514/>)

高知大学タイリエゾンオフィス開所式 (11月20日)



高知大学タイリエゾンオフィスがカセサート大学バンケンキャンパスに開設され開所式が行われました。

同大学はこれまで、タイ国内ではコンケン大学、チェンマイ大学、カセサート大学、タマサート大学と協定を締結し学術交流や学生交流を行ってきました。

同大学の海外リエゾンオフィスは、海洋学分野での学術交流のためにフィリピンに 2 つ、語学研修のために中国に 1 つ設置されています。タイのオフィスは学生・研究者交流、タイ人同窓会の活動拠点、タイ人留学生の獲得を目指しています。

日本の大学のタイ進出は目覚ましく、2014 年度だけで高知大学を含む 5 つの大学がオフィスを開設し、現在 30 を超える大学がオフィスをしています。

【リエゾンオフィスにて。左よりカセサート大学 Damrong 学術担当副学長、高知大学菊池国際・地域連携担当副学長】



(JSPS Bangkok Office ホームページ: <http://jsps-th.org/2014/11/20/2632/>)

バンコク研究連絡センターの参加イベント

ODA60 周年記念セミナー“Thailand-Japan Cooperation, Past and Future”（11 月 24 日）



【インタビューを受ける Dr. Surin】

日本の ODA60 周年、JICA バンコク事務所開設 40 周年を記念した「タイと日本の協力—その実績と将来展望—」式典・セミナーに山下センター長、山田副センター長が出席しました。

ASEAN 前事務総長の Dr. Surin Pitsuwan の基調講演のほか、タイにおける日本の ODA による 4 つのベストプラクティスの紹介、2015 年以降の日・タイの協力の展望に関するパネル討議など興味深く拝聴しました。

Dr. Surin の基調講演は、聴衆を引きつけて離さない巧みな話術でした。世界で唯一タイには人間の安全保障省があること、中進国になったタイは、ここから先進国の仲間入りするためには更なる投資が必要とのことで、日本と一緒に「三カ国協力」を推し進めるべきなど、示唆に富む講演となりました。



（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/11/24/2650/>）

名古屋大学とラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校(RMUTT)の学術交流協定調印式（12 月 8 日）



【左より Dr. Rasaert Phinpathomrat RMUTT 学長と松尾清一名古屋大学副総長】

ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校(RMUTT)と名古屋大学との間で学術交流協定調印式が行われ、山下センター長が出席しました。

RMUTT は RIT (ラジャマンガラ工科大学)傘下の 9 大学の一つであり、その中心的な役割をはたしている 9 学部 2 万人の学生が通う総合大学です。

名古屋大学が文部科学省と独立行政法人科学技術振興機構による「革新的イノベーション創出プログラム (COI STREAM)」拠点事業に採択された課題「多様化・個別化社会イノベーションデザイン拠点～いつまでも生き活きと活動し暮らせる社会とモビリティ～」の遂行のため、両大学はフィールド検証を共同で行うことを目指します。

調印式の会場では、今年度のノーベル物理学賞受賞者 2 人（赤崎勇名誉教授、天野浩教授）をはじめ多くのノーベル賞受賞者を輩出している名古屋大学に賞賛の声が寄せられました。

（JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/12/08/2667/>）

バンコク研究連絡センターの参加イベント

第 8 回アジア学術振興機関長会議・第 6 回ジョイントシンポジウム開催（11 月 27 日）



第 8 回 The Asian Heads of Research Councils (ASIAHORCs) (アジア学術振興機関長会議) 本会議及び第 6 回 ASIA HORCs ジョイントシンポジウムがタイ学術研究会議 (NRCT) のホストによりバンコクで開催されました。ASIA HORCs は、近年のアジア地域における研究者の国際的な流動と一国では対応できない地域や地球規模野の研究課題に取り組む必要性の高まりから、アジアにおける研究の推進を目的としたネットワーク強化のために、アジア 10 カ国の学術振興機関により形成されました。

本会議は 2007 年より毎年開催され、各国の科学技術動向を報告し今後の課題を話し合います。2009 年より本会議と並行してジョイントシンポジウムが開催されており、アジアの若手研究者育成と研究者間のネットワーク構築を目的としています。

今年は、本会議は「頭脳流出」、シンポジウムは「気候変動」をテーマとして実施されました。

オープニングセッション

来賓として在タイ日本国大使館佐藤重和大使が挨拶を述べられました。佐藤大使は、アジア地域が世界の成長センターとして存在感を高めている中 ASIA HORCs の重要性を認識しており、今回の本会合のテーマである「頭脳流出」及び「気候変動」はアジアが取り組むべき重要な課題であると述べました。

基調講演

ジョイントシンポジウムのテーマである「気候変動」について、前世界保健機構 (WHO) 東南アジア事務局長、Dr. Samlee Plianbangchang が「気候変動の健康への影響」をテーマに、また国際連合食糧農業機関 (FAO) 小沼廣幸アジア太平洋地域代表兼事務所長が「気候変動の食糧生産と食料安全への影響」というテーマで基調講演を行いました。

小沼事務所長は、人口増加、都市化等の食糧危機の背景にある要因をわかりやすく説明された上で、食糧危機が進む一方で農業開発分野への投資が急速に減っていることを指摘され、農学分野の研究に力を入れることが食料危機解決の重要な鍵となると話されました。

これらのテーマは、引き続き行われる二つのジョイントシンポジウムのサブテーマとして設定されています。



【小沼事務所長の講演】

本会合「頭脳流出」



参加 8 か国のうちベトナムを除いて 7 か国の代表が各国の「頭脳流出への対応と人材活用施策」について報告しました。各国ともに優秀な人材の国内での確保や支援策を実施しており、タイでは国費による支援を受けて海外で研究留学をした場合、帰国後は数年間元の職場での勤務を義務付ける、それができない場合は、留学に関わった費用を全額弁償する、という規定が設けられています。

バンコク研究連絡センターの参加イベント

次年度の ASIA HORCs は JSPS がホストとして 11 月に日本で開催することに決定しました。本会議のテーマは「アジア各国の科学技術施策の傾向(Trend of Science and Technology Policy in Asian countries)」、シンポジウムは「ケミカルバイオロジー (chemical biology)」とすることを JSPS より提案しました。これらのテーマについては今後参加国間でさらに検討を進めていきます。



ジョイントシンポジウム



「気候変動」を大テーマとし、「気候変動の健康への影響」、「気候変動の食糧生産と食料安全への影響」という二つのサブテーマに基づきアジアの若手からシニアまで幅広い研究者が発表を行いました。

日本からは「気候変動の健康への影響」部門で東京大学国際高等研究所・福士謙介教授、山形大学農学部・渡辺徹准教授、東京大学大学院医学系研究科・安本晋也特任助教が発表されました。また、「気候変動の食糧生産と食料安全への影響」部門では独立行政法人農業環境技術研究所、櫻井玄研究員が発表されました。

【福士教授の講演】

福士教授は発表の最後に、気候変動対応を目的とした国際プラットフォームを紹介し、ASIA HORCs は各国がネットワークを形成する良い機会であり、同枠組みと他の国際プラットフォームが連携するとののではないかと提案されました。

JSPS タイ同窓会メンバーも活躍されており、「気候変動の健康への影響」部門で JSPS タイ同窓会 (JAAT) 事務局長 Dr. Danai Tiwawech がセッションチェアを務められ、8 月に JAAT が主催した Thailand Research Expo 2014 JAAT-JSPS-NRCT セミナーでも講演いただいたマヒドン大学薬学部 Wichet Leelamanit 助教 (JAAT メンバー) が講演されました。



【左より Dr. Danai、Dr. Wichet】



ASIA HORCs により、アジアの学術振興機関の連携促進、研究者ネットワークの構築につながり、頭脳循環が活発になる環境がアジアの中で整えられていくことが期待されます。

【学術振興機関間での和やかな交流の時間も設けられました。】

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/11/27/2685/>)

バンコク研究連絡センターの参加イベント

海外事務所事務担当者連絡会（12月8日、9日）

長崎大学国際連携研究戦略本部の発案により海外事務所事務担当者連絡会が JSPS バンコク研究連絡センターで開催されました。本会議は、大学事務職員間の海外拠点運営に関する情報共有を目的としています。長崎大学、大阪大学、京都大学は各大学の拠点に事務職員を派遣しています。静岡大学は今後海外での展開を視野に入れて会議に参加されました。



参加者：大阪大学 微生物病研究所研究協力係 タイ拠点担当 永見一彰
京都大学 ASEAN 拠点 城 礼美
静岡大学 国際交流課 西山卓男・グローバル改革推進機構 原 芳久
長崎大学 国際連携戦略本部事務室（海外拠点）齋藤 圭・夫津木芳美
ベトナム拠点 中尾隆宏・アフリカ海外教育研究拠点 小谷昌之
日本学術振興会 バンコク研究連絡センター 山田大輔・轟 裕美



会議と併せて大阪大学 微生物病研究所タイ拠点、大阪大学 ASEAN センター、東海大学 ASEAN オフィス、京都大学 ASEAN オフィスを訪問し、海外事務所運営の様子を見学しました。

会議では各機関の事業紹介後、会計、人事、総務等の観点で課題を提起し、解決方法を議論しました。

各機関とも国立の機関であり、日本とは異なる環境の元で会計処理や地元の人々とのやりとりの中で抱えている困難を事務職員同士で情報を共有し得たことは、問題解決の糸口になり得たのではないかと考えます。海外に派遣されて実際に業務を行っている事務職員の数はまだ少なく、機関を超えた横の連携は今後も重要性を増すこととなります。

当センターの山田副センター長及び轟国際協力員も大学職員から出向しており、大学連携型法人として JSPS が大学の活動に協力することは大いに意義がありました。

【会議の様子】



(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/12/09/2677/>)

バンコク研究連絡センターは、日本学術振興会の国際交流事業で訪日経験のある研究者の組織である「JSPS 同窓会」の支援も積極的に行っており、現在管轄地域内に同窓会が組織されているタイ・バングラデシュ・フィリピン JSPS 同窓会の活動支援を行っています。

第 3 回 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会の実施 (10 月 8 日)

同窓会理事に加えてオブザーバーとして JSPS 及び NRCT、またチェンマイ、コンケンの JAAT 代表として、チェンマイ大学の Dr. Sirikan、Dr. Saisamorn、コンケン大学の Dr. Kittisak に参加頂きました。



【理事会に参加した JAAT 理事、NRCT、JSPS バンコク研究連絡センター】

主な議題は以下の通りです。

- ・ Thailand Research Expo 2014 で開催した JAAT-JSPS-NRCT セミナー“Long life without cancer”の報告。多くの研究者が参加し大きな成功を収めたことが確認された。
- ・ JAAT 会員数は会議開催日時点で会員数 51 名。
- ・ 2014 年、7 名の論博メダル授与者を発表。
- ・ 論博メダル授与式・JAAT 総会、JAAT セミナー開催方針とテーマを議論。開催地はバンコクとチェンマイの 2 つの候補地が挙がったが、後日行った JAAT メンバーへのアンケート調査の結果、2 月 27 日（金）にバンコクで開催決定。セミナーテーマ、招聘する日本人研究者は JAAT 理事会メンバーを中心に検討。
- ・ Dr. Sirikan、Dr. Surawadee のご尽力により JAAT ウェブサイトが立ち上げられた。

(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/10/08/2598/>)

第 4 回 JSPS タイ同窓会 (JAAT) 理事会の実施 (12 月 16 日)

第 4 回理事会でも引き続き 2 月 27 日開催予定の論博メダル授与式、JAAT 総会、JAAT セミナーについて議論を行いました。

- ・ 2015 年の同窓会理事は地方大学（チェンマイ、コンケン、ナレスワン、プリンスオブソクラ、マヒドン）からもそれぞれ 1 名ずつ選出。
- ・ 2 月 27 日に開催する学術セミナーのテーマは「高齢化社会」とし、タイ人講師 1 名、日本人講師 1 名を招聘。講師は同窓会側で選出する。
- ・ 論博メダル授与式にあわせてメダル授与者が博士論文の発表を行い、このセッションもセミナーとあわせて一般に公開する。
- ・ 会員間のネットワーク強化のため同窓会名簿を作成する。



(JSPS Bangkok Office ホームページ：<http://jsps-th.org/2014/12/16/2762/>)

今回は在タイ日本国大使館、広報文化担当の俵幸嗣一等書記官より、タイの高校における「研究者のたまご」を育てる取り組みについてご寄稿いただきました。本特集では寄稿の一部を「バンコクの風」用に一部抜粋しております。オリジナルは当センターのホームページ (<http://jsps-th.org/activity/>) に記載しております。
※寄稿の記事・論文、図表、写真等（以下「記事等」という）の著作権は、記事等の執筆者に帰属しています。

科学者を育てる学校（サイエンス・スクール）づくりの試み（タイ）

在タイ日本国大使館 俵幸嗣¹

1. はじめに

「バンコク近郊にある『Mahidol Witayanusorn School』をモデルに、タイの地方に通常の学校の 10 倍の予算をかけて科学者を育てる学校をつくりたい。欧米ではなく、日本のスーパー・サイエンス・ハイスクールと協定を結び日本の学校との交流を深めて将来の国を背負って立つ優れた人材を育てていきたい。日本政府にもぜひ協力をお願いしたい。」と元キングモンクット王工科大学学長のゴーン・ペッツワン氏²が熱く語ってくれたのは、同氏が初めて大使館を訪問してくれた、2012 年 9 月のことでした。

当初は半信半疑でしたが、その後同年 11 月と 2013 年 1 月に大使や次席公使らのほか、大学の関係の方々ともに立て続けに留学説明会のために、ピサヌローク県、トラン県にあるサイエンス・スクールを訪問し、先生や生徒さんたちに直接触れることで、その気持ちは変わりました。勉強に意欲的で素直、英語も物怖じせず話することができる生徒が多い、そして政府からの特別な支援が充実している、そのような印象を受けたのです。本稿では、タイにおいて科学者を育てる学校づくりに取り組む「サイエンス・スクール」について紹介したいと思います。



【サイエンススクールトラン校の学生と佐藤大使】

2. マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクール (Mahidol Witayanusorn School)

(1) 概要



タイ教育省は、2000 年度に全寮制で全生徒選抜制のサイエンス・スクール「マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクール」を設立しました。

公立の学校ですが、教育省からは独立し、学校委員会 (School Board) によって運営されている、タイで唯一の独立法人学校 (autonomous boarding school) です。タイの学校はいわゆる中等学校 (中学と高校が併設されている) が多くなっていますが、この学校は高校のみになっています。また 1 クラス 24 人の少人数学級として、1 学年 240 名、合計で 720 名の学校です。240 名の定員に毎年 1 万 5 千人が応募するエリート校です。試験は科学や数学を中心に行われ、1 次試験で 500 名に絞った後、2 次試験で 240 名の合格者が決定します。

教職員は、先生 78 名、サポートスタッフ 63 名のほか、校長 1 名、教頭 3 名、役員 16 名で構成されています。学期はほかの多くのタイの学校と同じように 2 学期制を採用し、1 学期が 5 月中旬から 9 月、2 学期が 10 月下旬から 3 月上旬となっています。全寮制で食事も 3 食用意されますが授業料は無料です。

¹ 本稿における見解は在タイ日本大使館の見解ではなく、あくまで筆者個人の見解である。

² ゴーン氏は、高校卒業後 (1958 年) タイ政府奨学金を得て英国のインペリアルカレッジの工学部に留学し首席で卒業。1967 年に同大学の博士課程を修了。タイに帰国後 1971 年にキングモンクット工科大学の初代工学部長に就任。1986 年～1992 年までキングモンクットラカバン工科大学の学長として活躍される。現在はタイ教育省・チュラポーン王女殿下・サイエンススクールの顧問を務められているほか、2014 年にはタイの「国家立法議会議員 (Member of National Legislative Assembly)」に選出されている。

(2) 履修科目

	科目	単位数	合計
基礎科目	数学	6.5	40.0
	科学	物理	
		化学	
		生物	
		地理	
		宇宙	
		環境	
	タイ語	6.0	
	英語	6.0	
	職業・技術	コンピュータ	
		デザイン・技術	
	社会・宗教・文化	8.0	
	美術	3.0	
	保健体育	3.0	
専門科目	数学	5.5	39.0
	科学	物理	
		化学	
		生物	
		イノベーション	
		科学セミナー	
		科学プロジェクト	
		基礎工学	
	外国語	英語	
		第2外国語	
	職業・技術	コンピュータ	
選択科目	一般選択	数学・科学	7.0
	特別選択	自由	

【学校の資料より作成】

卒業後の進路としては、大まかに示すと、医学系に進む生徒が約 50%、工学系約 20%、理学系約 20%、そのほか約 10%とされています。

(3) その他

海外との交流にも積極的であり、海外の高校等（9 カ国）と協定を結び、毎年約 100 名の高校生が交流プログラムに参加をしています。日本の高校では立命館高校と協定を結んで、相互の交流活動を積極的に行っています。そのほか、日本の機関では、早稲田高校、東北大学、名古屋大学、独立行政法人国際交流基金と連携・協力関係を築いています。

2004 年以降、科学オリンピックにも積極的に参加し、2013 年までの 10 年間で 72 のメダルを獲得しています。2013 年には物理、生物、化学、情報学、宇宙物理学の分野で金・銀・銅合わせて 10 のメダルを獲得しました。

日本政府奨学金試験も多く、多くの高校生が受験をしています。2015 年度の留学生試験（大学の学部留学生、工業高等専門学校留学生、専修学校留学生）には、230 校から 1174 名の受験者があり合計で 54 名が合格をしましたが、この高校からは受験者数（59 名）、合格者数（9 名）ともに 2 番目でした（応募者のあった学校の一覧については別添資料参照）。そのほか、タイ政府奨学金、シンガポール政府奨学金、科学オリンピック奨学金、東北大学、名古屋大学、オーストラリア国立大学、韓国 KAIST 大学などからも、奨学金を得て留学をしています（2012 年度の実績では 39 名の学生が奨学金を獲得。）

卒業のためには、基礎科目 40 単位、専門科目 39 単位、選択科目 7 単位を履修する必要があります。

このほか①モラルや倫理・ホームルーム、②フィールドスタディやアカデミックキャンプ、③社会活動、④タイアイデンティティやタイ文化（タイ舞踊・タイ音楽）、⑤スポーツ活動の時間が、通常の授業に加えて行われています。選択制ですが、第 2 外国語の中には日本語も含まれていて、日本語科目履修者は週に 1～2 時間日本語を勉強しています。

授業の特徴としては、教育省が設定する通常の授業については 1 年半で終えて、その後はより専門的な内容を学ぶ時間に充てているということです。また、「科学プロジェクト」の科目を設け、一定の課題を高校生自らが設定し 2～3 ヶ月ほどの時間をかけてグループ調査を行い、レポートにまとめ上げていることも興味深い内容でした。

近郊の大学の先生方にもアドバイスを受けながらまとめているということで、最後の発表も英語で行われることが多いそうです。

タイでは、自ら考えたり、創り上げたりする力をつけることが課題となっていますが、学校として将来の研究者のたまごたちに、そうした機会を積極的に作る努力をしていることを感じました。

タイのすべての高校生（3 年生）が受験する学力テスト「Ordinary National Educational Test(O-NET)」の 8 科目（Science, Maths, Thai language, English, Social Studies, Health and Physical Education, Work Education）の平均点によるランキング（2012 年度）では全国の高校の 1 位にランキングされています（ランキング 100 については別表参照）。

3. チュラポーン・サイエンス・スクール (Princess Chulabhorn Science School)

(1) 概要

マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールをモデルに、地方にもサイエンス・スクールを創ろうということでプロジェクトが進んでいます。1993年にチュラポーン王女殿下の誕生日を記念して、12の地域に設立されたチュラポーン・カレッジ（中等学校（中学校と高等学校併設））に、2010年又は2011年からマヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールをモデルにしたカリキュラムが導入され、入学試験も高等学校への入学については、統一の試験が使われることになりました。

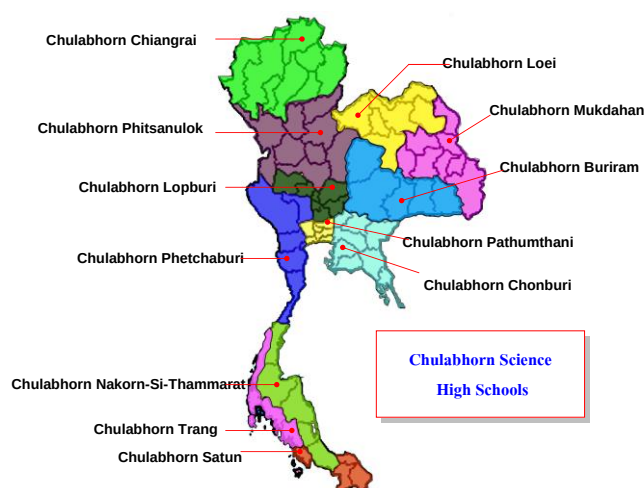
マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールは全国の学生を対象にしていますが、サイエンス・スクールは、12のエリアに分けて入学者を決め、地域の優秀な高校生を地域で育てる考え方を採っています。中学入学時、高校入学時ともに試験を行い、サイエンス・スクールの中学生であっても、高校入学時には他の中学の生徒と同じ条件の下で試験を受けないといけないことになっています。

12のサイエンス・スクールについては、日本との関係を重視し、日本のスーパーサイエンス・ハイスクールと協定を結び学生交流を積極的に行ったり、理系の学校ですが第2外国語として日本語の授業を提供したりしています。

マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールとは異なり、教育省の管轄の下にある公立学校で、中学校と高等学校が併設された男女共学の全寮制の中等学校になっています。

生徒の数は、中学校・高等学校あわせて720人。中学1年生～3年生は1クラス24人で1学年4クラス、高校1年生～3年生は1クラス24人で1学年6クラスです。どの学校も街から少し離れたところに、広大な敷地の中に立派な校舎と学生寮が建てられています。この学校に中学校・高等学校あわせて720人という少ない生徒（地方の名門校であれば中学校・高等学校あわせて3000人～4000人の生徒がいるところも多く見られます）を対象に教育を行っている状況からは、全国から優秀な科学者を育てるといって、タイ教育省の覚悟が見てとれます。

PISA³の結果（2012）を見ると、タイのサイエンス・スクールの平均点は、OECD加盟国や日本の生徒の平均点を大きく上回っており学力の高さが分かります。



【タイ教育省作成資料より抜粋】

	数学リテラシー	科学リテラシー	読解力
タイのサイエンススクール（12校）の平均	570	565	554
OECD加盟国の平均	494	501	496
タイの学校の平均	423	441	444
日本の学校の平均	536	547	538

【サイエンススクールの平均：タイ教育省資料より抜粋、その他のデータ：「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」（2013年12月文部科学省国立教育政策研究所）より抜粋】

タイの教育省がタイの全ての高校3年生を対象に行う学力テストの8科目の平均点の結果（2012）をみると、全国トップ100に8校が入っています（Chiangrai, Mukdahan, Lopburi, Pathumthani, Chonburi, Phetchaburi, Nakhon Si Thammarat, Trang）。

(2) 履修科目（高等学校）

卒業のためには86単位を履修する必要があります。12のサイエンス・スクールの履修単位数は概ね同じ内容になっています。以下の表はムクダハン校の例です。マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールのように、基礎科目・専門科目・選択科目を分けていないようですが、全体としては似たような履修科目数になっています。

3 OECDが進めているPISA（Programme for International Student Assessment）と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査（数学的リテラシー、科学的リテラシー、読解力の3分野）。3年に1度15歳（高校1年生）の生徒を対象に学力テストを行っている。基本はOECD加盟国を対象にしているが希望すればどの国も参加することができる。2012年は65カ国・地域（OECD加盟国34カ国、非加盟31カ国・地域）、約51万人の生徒を対象に調査を実施。

特集

【履修単位数】 高等部（1単位は週2時間を20週（2期制の1期分））

科目		単位数	合計
数学		14.0	86.0 単位
科学	物理	8.0	
	化学	7.0	
	生物	7.0	
	地理・宇宙工学	1.5	
科学プロジェクト・研究活動		4.5	
タイ語		6.0	
英語		12.0	
第2外国語		1.5	
社会・宗教・文化		9.0	
保健体育		3.0	
美術		3.0	
職業・技術		4.0	
ライフスキル		1.5	
選択		4.0	

【学校資料より作成】

1日の授業時限数は、朝の朝会のあと1日7時限（1時限55分）の授業を基本としています（場合によっては6時間だったり8時間だったりすることもある）。以下の表はムクダハン校の高校1年生（第2外国語の選択科目は日本語）の1週間の授業の例になります。

【授業の時間】 高等部（週当たり時間数） 【学校からの聞き取り調査により整理】

時間	8:00-8:30	1	2	3	4	昼	5	6	7	8
		8:30-9:25	9:25-10:20	10:20-11:15	11:15-12:10		13:00-13:55	13:55-14:50	14:50-15:45	15:45-16:40
月	全校朝会	数学	物理	生物	数学	昼食	社会・宗教・文化	社会・宗教・文化	社会・宗教・文化	日本語
火		タイ語	数学	生物	数学		英語	化学	日本語	日本語
水		化学	数学	化学	化学		生物	社会	Home Room	Home Room
木		物理	タイ語	ICT	ICT		化学	体育	Club	
金		英語	化学	数学	英語		社会	物理	英語	

学年や学期によって変わるので単純に比較はできませんが、「日本語専門コース」の生徒とサイエンス・スクールの生徒の1週間の授業数を一般的な例で比較をしてみると理数系の授業時間数が多いことが分かります（サイエンス・スクール・ムクダハン校とサラウィッタヤ中等学校（バンコク。中学校 2,100 名、高等学校 1,800 名）の高校生の授業数を比較）。

【履修科目】 高等学校（週当たり時間数）

	タイ語	数学	科学	社会	仏教	英語	ICT	美術	音楽	体育	会議	日本語	第2外国語
サイエンス・スクール	2	6	11	2	2	4	2	1		1	2		3
サラウィッタヤ・スクール（日本語コース）	4	2	2	2	2	7	0	1		2	1	8	2

*サイエンス・スクールの「科学」は、物理・化学・生物の合計時間数 【学校資料より抜粋】

（3）日本との協力関係

●日本のスーパーサイエンス・ハイスクールとの交流

日本のスーパーサイエンス・ハイスクールと協定を結びお互いの学校を訪問したりスカイプなどを使って交流しています⁴。

⁴ 表に記載されている日本のスーパーサイエンス・ハイスクールのほかに、大分舞鶴高校がロップリー校と、東海大学付属高輪高校がトラン校と相互交流を図るべく協定締結の協議を行っています。

	サイエンス・スクール	協定校（スーパーサイエンスハイスクール）	O-NET
1	Princess Chulabhorn's Chiangrai	東京学芸大付属高校	61 位
2	Princess Chulabhorn's Phitsanulok	宇都宮女子高校	
3	Princess Chulabhorn's Loei	静岡北高校	
4	Princess Chulabhorn's Mukdahan	広島大学付属高校	38 位
5	Princess Chulabhorn's Lopburi	嵯峨野高校	
6	Princess Chulabhorn's Buriram	大館鳳鳴高校	
7	Princess Chulabhorn's Pathumthani	大阪教育大学付属高校	85 位
8	Princess Chulabhorn's Chonburi	市川学園高校	98 位
9	Princess Chulabhorn's Phetchaburi	文教学院大学付属高校	76 位
10	Princess Chulabhorn's Nakorn-Si-Thammarat	奈良青翔高校	69 位
11	Princess Chulabhorn's Trang	名城大学付属高校	4 位
12	Princess Chulabhorn's Satun	古川黎明高校	39 位

【タイ教育省からの聞き取り調査により整理】

●日本語教員の派遣

国際交流基金が実施する、ASEAN 諸国に日本語教員を派遣する「日本語パートナーズ派遣プロジェクト⁵」によって、2014 年 9 月から日本語授業を行っているサイエンス・スクールに日本語教員が派遣されています。（8 校。Chiangrai, Phitsanulok, Mukdahan, Buriram, Chonburi, Phetchaburi, Nakon Si Thammarat, Trang）

●科学系教員の派遣

JICA のボランティア教員として、チョンブリ校にコンピュータ技術の教員を 2015 年 5 月頃に派遣予定です。その後順次派遣対象校を増やしていく予定とされています。

●日本政府の短期の青少年交流プログラムへ参加



日本大使館から、2012 年度にキズナプロジェクト、2013 年度以降は JENESYS (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youth) 2.0 や高等専門学校体験プログラム、さくらサイエンスプログラムなどに、サイエンス・スクールの高校生を推薦し積極的に参加をしてもらっています⁶。

【石川県で行われたさくらサイエンスプログラム】

●日本政府奨学金留学生

2015 年度の大学の学部留学生、高等専門学校留学生、専修学校留学生を目指して、サイエンス・スクールから、6 校（Phetchaburi, Chonburi, Pathumthani, Chiang Rai, Buriram, Trang）から 66 名の高校生が応募をしました。全体で 1,312 名の応募者があり 54 名（競争率約 24 倍）しか受からないという高い競争率でしたが、Pathumthani 校から高等専門学校留学生、Phetchaburi 校から専修学校留学生が 1 名合格をしました。

●サイエンス・スクール科学技術セミナーの実施

2014 年度より宇宙をテーマに、宇宙航空研究開発機構（JAXA）からタイのアジア工科大学に派遣されて教鞭をとっている中村信一教授にお願いをして、科学技術セミナーを始めました⁷。毎回、英語での 2 時間の講義に 200～300 名の高校生が参加をしてくれています。最後の質疑応答の時間に質問が止まらなかったり、講義終了後に中村先生にサインを欲しいと高校生を見ると、科学に興味を持っている学生が多いことを改めて実感できます。

⁵ 2013 年 12 月の日・アセアン特別首脳会議において、日本政府がアジアとの新たな文化交流政策「文化の WA（和・環・輪）プロジェクト」を提案。国際交流基金が「アジアセンター」を立ち上げて①芸術・文化の双方向交流、②日本語学習支援の二本柱を実施。日本語学習支援の中心が「日本語パートナーズ派遣プログラム」。2020 年までに ASEAN 諸国に合計 3,000 人の日本語学習パートナーを派遣する予定です。

⁶ キズナプロジェクト（福島）5 名、アジアユース人材育成プログラム（沖縄）5 名、苫小牧高専体験プログラム（北海道）4 名、JENESYS2.0（北海道（ものづくり）・筑波（宇宙）・神奈川（日本文化）、愛知（日本語））44 名、さくらサイエンスプログラム（東京・大分・石川）25 名

⁷ 2014 年度は Chiangrai, Pathumthani, Mukdahan, Trang, Satun で実施。毎回、開催校以外のサイエンス・スクールからも 50 名ほどが、4 時間から 5 時間の道のりをバスで来てくれます。タイ教育省にも現地での移動やホテルの手配などで協力を得ていますが、2015 年度も実施をして欲しいと要望ができています。

●CG セミナー・ワークショップの実施

2014 年 12 月 12 日にマヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールにおいて、CG アーティスト林田宏之氏によって、12 のチュラポーン・サイエンス・スクールのコンピュータの先生を対象に CG セミナー・ワークショップを開催しました。各校から先生が 2 人ずつ参加してくれたほか、マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールから 6 名の先生が参加しました。

【中村教授による科学技術セミナー（宇宙）ムクダハン校】



4. おわりに

マヒドン・ウィッタヤヌソン・スクールは開設から 15 年しか経過していませんが大変な成果を上げて、タイはもちろん、日本の大学だけでなく世界の大学から奨学金を得られるまでになっています。卒業後に医者を目指す若者も多く、科学者を育てていないと厳しい声も一部には聞かれますが、今後も順調にいい教育を行ったいい人材を育ててほしいと思います。

チュラポーン・サイエンス・スクールについては、本当の成果は今後の結果をまたなければいけません、引き続き日本政府としての協力を続け、タイでの人材育成への協力とタイと日本の高校生の相互交流に新たな発展を築いていきたいと思います。

2015 年 12 月 22 日～24 日まで、サイエンス・スクールの Phetchaburi 校において、タイ教育省の主催により、「タイ・日本 学生サイエンス・フェア 2015」が行われます。これから本格的な参加者募集のお知らせが始まりますが、タイの高校生 300 名、日本の高校生 100～150 名の参加が予定されています。1 日目：科学者による講演、2 日目：高校生による研究発表、3 日目：フィールドトリップについて検討がされています。当日はシリントン王女殿下やタイの教育大臣も参加します。タイ国内の移動費、宿泊費、食事代は全て教育省が対応してくれる予定です。少しでも多くの高校生が日本からこのサイエンス・フェアに参加をしてほしいと思います。今後詳細については、ウェブサイト (www.tjssf2015.net) で確認をいただきたいと思います。

タイの地でも、科学に関心を持つ優秀な若い高校生がいます。「バンコクの風」の読書の方々は研究者の方が多いと思いますが、タイの若い高校生や学生へのサポートをこれからもお願いをしたいと思います。

【別表 1】O-NET(Ordinary National Educational Test)の成績による TOP100 2012 年度 8 科目（科学、数学、タイ語、英語、社会、体育、保健、ワークエデュケーション）の平均点の高校別ランキング O-NET =タイの全ての高校 3 年生が受ける学力テスト

※オリジナルの表からマヒドン・ウィッタヤヌソン・スクール及びチュラポーン・サイエンス・スクールのみ抽出

順位	学校名	所在県	平均点
1	Mahidol Witthayanusorn School	Nakhon Pathom	68.58
4	Princess Chulabhorn's College Trang	Trang	58.41
38	Princess Chulabhorn's College, Mukdaharn	Mukdaharn	49.31
39	Princess Chulabhorn's College, Satun	Satun	49.29
61	Princess Chulabhorn's College, Chaing Rai	Chaing Rai	47.23
69	Princess Chulabhorn's College, Nakhon Srithammaraj	Nakhon Si Thammarat	46.54
76	Princess Chulabhorn's College, Petchburi	Petchburi	46.06
85	Princess Chulabhorn's College, Pathumthani	Pathumthani	45.70
98	Princess Chulabhorn's College, Chonburi	Chonburi	45.18

【タイ教育省より聴取し筆者が作成】

特集

【別表 2】 日本政府奨学金試験応募者のいる学校一覧 (2015 年) 合計応募者数: 1,175 名
 U1: 学部留学生 (人文社会科学系) U2: 学部留学生 (自然科学系) C: 高等専門学校留学生 S: 専修学校留学生
 ※合格者のいる高校のみオリジナルの表から抽出

学校名	所在県	U1 応募者	大使館 推薦	合格者	U2 応募者	大使館 推薦	合格者	C 応募者	大使館 推薦	合格者	S 応募者	大使館 推薦	合格者	応募者 合計	大使館 推薦 合計	合格者 数 合計
Triam Udom Suksa	Bangkok	60	7	3	137	14	14	27	6	4	15	5	3	239	32	24
Mahidol Wittayanusorn	Nakhon Pathom	5	2	2	53	7	6	1	1	1	0	0	0	59	10	9
Suankularb Wittayalai	Bangkok	4	2	2	22	3	2	0	0	0	1	0	0	27	5	4
Samsenwittayalai	Bangkok	6	0	0	16	0	0	1	1	1	2	1	1	25	2	2
Yothinburana	Bangkok	3	0	0	12	0	0	4	2	1	4	0	0	23	2	1
Princess Chulabhorn's College Phetchaburi	Phetchaburi	0	0	0	0	0	0	8	0	0	13	1	1	21	1	1
Princess Chulabhorn's College Pathumtani	Pathumtani	1	0	0	6	0	0	8	1	1	0	0	0	15	1	1
The Prince Royal's College	Chiang Mai	3	1	0	8	0	0	0	0	0	3	2	1	14	3	1
Benjamarachalai	Bangkok	2	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	1	9	0	1
Benchama Maharat	Ubon Ratchathani	0	0	0	0	0	0	7	1	1	0	0	0	7	1	1
Hat Yai Wittayalai	Songkhla	0	0	0	4	0	0	2	2	1	1	0	0	7	2	1
Saint Joseph Convent	Bangkok	2	0	0	2	0	0	0	0	0	2	1	1	6	1	1
Benchamarachutit Ratchaburi	Ratchaburi	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	1	1	4	1	1
Matthayom Wat Nairong	Bangkok	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	3	1	1
UdonPittayanukoon	Udon Thani	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	1	3	1	1
Streetsmutprakarn	Samut-prakarn	0	0	0	2	0	0	1	1	1	0	0	0	3	1	1
応募者のいる全ての学校の合計		234	18	7	756	25	22	149	15	11	173	22	11※	1174	80	51

※合格者 14 名の内、大学在学中の 3 名は含まれていない。【大使館作成資料より抜粋】

センター活動記録

バンコク研究連絡センターの10月から12月期の活動は以下のとおりです。センターにはタイ及びASEAN諸国との学術の国際交流を目的とし、日本やタイの研究者や高等教育関係者が訪れます。当センターは訪問者への現地での便宜供与や学術情報の交換・助言を行っています。詳しい活動記録は当センターホームページ (<http://jsps-th.org/>) に掲載しておりますのでご参照ください。

10月

- 21日 東海大学・富田紘央助教、国際部・島田由美子職員来訪
- 22日 科学技術振興機構（JST）伊藤宗太郎国際担当執行役、小林治 JST シンガポール事務所長、西川裕治主任調査員、岸田絵里子調査員来訪
- 28日 東京医科歯科大学生体材料工学研究所・竹本佳弘特任教授来訪
- 29日 吉村敏男・福岡県議会議員、泉日出夫・福岡県タイ友好議員連盟事務局長、福岡県バンコク事務所・川越信一郎所長、東幸治副所長来訪
- 30日 Danai Tiwawech・JSPS タイ同窓会事務局長、マヒドン大学薬学部・Wichet Leelamanit 助教来訪

11月

- 4日 芝浦工業大学国際部グローバル教育推進課・杉山修課長来訪
- 17日 宮城教育大学・見上一幸学長、文部科学省大臣官房国際課・佐藤兆昭政策情報分析官来訪
- 17日 京都大学北部構内共通事務部管理課研究推進掛・飯島由多加主任来訪
- 18日 東京女学館大学・上別府隆男教授来訪
- 18日 明治大学 ASEAN センター・江藤賢一教授、3名の明治大学学生（カンボジア人留学生 Nop Visal さん、タマサート大学交換留学中の上江洲祐貴さん、カセサート大学交換留学中の針谷百恵さん）とともに来訪
- 20日 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）・辰野まどか事務局長来訪
- 21日 ナレスワン大学理学部 Siripong Premjet 准教授、Duangporn Premjet 准教授来訪
- 21日 高知大学国際連携推進センター・新納宏特任教授、矢田裕美国際企画係長来訪

12月

- 4日 東京都総務局首都大学東京支援部・座間大介主任来訪
- 22日 大学共同利用機関法人自然科学研究機構生理学研究所・鍋倉淳一教授来訪
- 22日 中央大学・若林茂則教授（元副学長）、小川正純教授、国際センター・河本梨絵プログラムコーディネーターとタイ現地スタッフ・Teera Insawat さん訪問

ダイスケさんのダイ好きアジア #1



✿ ミャンマーの街角から



旅人にとってミャンマーはまだまだ秘境である。今ミャンマーはまさに開発ラッシュで、国を開放して外資が押し寄せ、ダイナミックに変化している光景がそこにはある。その一方で、ヤンゴンの街は歩いているだけでも風情があり、町並みには英国の建物もまだまだ残る。まだまだミャンマーは昨今の東南アジアではなくなくなってしまった素朴さが残っている。勤勉で敬虔な仏教徒であるミャンマーは犯罪も比較的少ないらしい。長財布をズボンの後ろポケットに歩いている人もいるぐらいだ。百聞は一見に如かず。まずは写真を見ていただきたい。そしてミャンマーを少しでも訪問したくなってくれたのなら、筆者にとっては幸甚である。

↑ ↓ ヤンゴンの市場にて。



↓ ミャンマーの僧侶と物売りの老人。タイとは袈裟の色が異なる。



伝統的な物売りの女性



遠くに見えるのは英国様式の旧ビルマ政庁

ダイスケさんのダイ好きアジア #2



タイの結婚式



すっかり欧風化してしまった日本の結婚式とは異なり、タイの結婚式はまだまだ仏式で行われることが多い。特に田舎の結婚式は、近隣の村人が総出で集まる大きなイベントとなる。

タイの結婚式は、早朝 7 時頃から始まる。まずは 9 人の僧侶を迎え、結婚を祝う読経が行われる。大抵の行事は遅れて始まるタイであるが、厳粛な雰囲気の中、僧侶の来訪だけは時間通り始まった。読経の後、僧侶達には食事がもてなされる。

その後 8 時 9 分より、新郎は友人達とともに新婦を向かえにパレードを行う。8 時 9 分というのは、タイでの縁起の良い数字ということらしい。200 メートルの道を新婦の家に辿り着くと、今度は新婦の友人が関所の番人となり、「よに逢坂の関はゆるさじ」と清少納言の歌のように通せんぼしてくるので関所料を払ってようやく新婦の家に入れてもらえることとなる。



新婦の家に入れてもらった後で、今度は新婦の両親に対して金細工や結納金を納める儀式となる。結納金は現金で準備され、確かに全額あることが確かめられる。そして結婚の誓いは結婚式の長が新郎新婦に向かって行い、聖なる米を会場にまき、聖なる糸を新郎新婦の腕に巻き付ける。その後は参列者が新郎新婦に祝福を祈りながら糸を手首に巻いていく。巻かれた糸は、3 日間はあることができないものである。

多くの人々からの祝福が終わった後、近隣の住人も参加した盛大な宴会が行われる。宴会では、タイの伝統的舞踊やカラオケ、ダンスが行われ、参加した客は酒を飲み、食べ物を楽しみながら過ごす。そして新郎新婦は忙しくて殆ど食事が出来ないことは古今東西変わらないようである。

タイも結婚披露宴は日本のようにホテルを利用して行うことが多くなったが、仏教に基づいた伝統的な結婚式は、今の日本では味わうことのなかなか出来ない大変貴重な体験であった。



■マヒドン大学附属シリラート病院、エボラ出血熱の抗体開発

マヒドン大学シリラート病院はエボラ出血熱の治療抗体開発に成功したと発表した。この抗体は一年以内に市場で流通が可能で、アフリカで何千人もの命を奪ったエボラ出血熱の治療に役立つことが期待されている。

研究チームを率いた Wanpen Chaicumpa 教授は、この研究成果を WHO に報告し今後の研究開発を加速させるために支援を得たいと述べた。今後数ヶ月間でアメリカのフロリダ大学と連携し、民間の実験施設で猿と人間を対象にこの抗体の臨床試験が行われる予定である。

Wanpen 教授は、この抗体はこれまでのものとは異なる特徴をもっていると説明した。非常に小さい抗体なので、感染した細胞に入り感染したウイルスたんぱく質に働きかけ感染した細胞内でのウイルス増殖を止めることができる。大学はすでにこの開発の特許を取得している。

シリラート大学病院の副研究院長 Ruengpung Sutthent 教授は、抗体治療開発をさらに進めるためにはより設備の整った研究施設が必要だと述べ、政府から資金面での支援を希望している。さらに研究を進めるためには 10 億バーツの予算が必要となる。

この抗体の動物への臨床実験について、シリラート病院はマヒドン大学が一部を所有するバイオ製薬会社 Siam Bioscience と連携する予定である。同社はバイオ製薬を量産する設備を備えている。

(10 月 3 日 Nation 紙)

■教育省での高等教育局分離の議論

(高等教育局分離の箇所を抜粋)

2014 年 10 月 8 日、Narong Pipattanasai 教育大臣及び Krissanapong Kirttikara 副大臣は教育省傘下の各機関の長の参加する会議で教育省の組織改革について議論を行った。

Narong 教育大臣は高等教育局、職業教育局、教育審議会に対して、教育省からの分離を検討するための調査を行うよう求めた。現在、教育省はさまざまな組織を内部に抱えているため業務の遂行が柔軟でないため、教育改革や教育の質の改善に遅れをきたしている。

以前は、高等教育局は大学省、教育審議会は内閣府の下に設置されており、2004 年に教育省傘下となった。教育大臣はこの時の組織変更の影響をまず調査することを求めた。この結果を踏まえて組織改革案が国家改革評議会に提出される。

職業教育局ではすでにワーキンググループを設置し、教育省からの分離について検討を始めている。この検討過程では海外の職業教育の事例も参考にされる。教育省管轄下にとどまるか、職業教育局傘下に部局を新設し業務分担するか、また、職業教育局として独立した省を設立するかの 3 つの選択肢が検討されている。

高等教育局については Kamjorn Tatiyakawee 事務局長によると、教育省からの分離案がすでに進行しており、「大学省」とするか「高等教育及び研究省」とするかを検討している段階である。

(10 月 14 日 タイ教育省)

■アジア開発銀行のタイの高等教育支援

(高等教育に関する情報のみ抜粋)

根岸靖アジア開発銀行 (ADB) タイ・カンントリーディレクターがタイ教育省を訪問し ADB と同省の今後の協力について議論を行った。根岸ディレクターの訪問には Theerakiat Charoensilp 大臣補佐官、Suthasri Wongsamarn 事務次官、Kamol Siribun 副事務次官、大学院教育研究開発部長の Chaiyuth Khanthaprab 准教授、Duriya Amatawiwat 国際連携戦略室長、高等教育局より Chadarat Singhadachakul 氏、Phutthachart Suphalak 上級研究員が参加した。

ADB は教育部門での支援経験が浅いため、教育支援を行う前にタイ開発研究機関 (TDRI) と協力してタイの教育開発や高等及び職業教育のデータを収集しタイの教育の得意分野や課題を把握しようとしている。

ADB はタイへの教育支援として、1999 年から 2006 年の間にタイ大学院教育研究開発部と協力して 5,932 万 USD の資金貸与を行い、この資金は研究開発や科学技術分野の人材育成、7 つの研究拠点設立 (1) 化学研究開発拠点、2) 環境衛生、毒物、化学物質管理拠点、3) 有害物質管理拠点、4) 石油、石油化学、先端材料拠点、5) エネルギー技術拠点、6) 農業バイオ技術拠点、7) ポストハーベスト技術開発拠点) に活用されてきた。

現在は、これに 4 拠点 (8) 数理学拠点、9) 物理学拠点、10) 生物多様性拠点、11) メディカルバイオテクノロジー拠点) が加わり全部 11 拠点となっている。Chaiyuth 部長は 300 万 USD の資金貸与申請が現在教育省で審議中であり、この資金は社会開発と研究及び 6 つの研究拠点設立に活用される予定だと述べた。

Suthasri 事務次官は、ADB に職業学校の開発支援を期待していると述べた。Phutthachart 上級研究員は、現在、職業教育局は ASEAN 諸国とツイニングプログラムを実施し職業学校の学生育成に取り組んでいる。これは ASEAN 経済統合にむけてタイ以外の国でも通用する技術を身につけた人材を育成する事業である。

根岸ディレクターは ADB は職業教育支援を得意としており専門家を派遣し助言することができると述べた。他の ASEAN 諸国も ADB に職業技術支援を求めており国際社会で競える人材を育成したいとのことである。

(10 月 17 日 タイ教育省)

■大学に求められる就職率の開示

タイの大学は専攻ごとの卒業生の就職状況を開示し、市場の需要に見合った人材育成を行うよう求められている。

Krissanapong Kirtikara 副教育大臣 (高等教育担当) は、学生の就職について以下のような懸念を示した。多くの学生が市場の需要に対して供給過多となっている専攻で学んだ結果、彼らの多くが大学で学んだ専攻に関連する分野に就職できていない。一方で、より人材を必要としている職業学校の卒業生が圧倒的に不足している。

現在、タイの高等教育は第 2 次長期高等教育計画 (the second phase of a 15-year development plan for higher education) の下、高等教育の質を向上し国の競争力を高めることを目標としている。この目標を達成するためには大学のガバナンス向上が重要である。コースの情報や卒業生の就職率を公開することも大学のガバナンス向上につながる。現在、200 万人以上の学生が大学で学んでおり、そのうち 20 万人の学士号保持者が卒業後に就職できていない。

Amornvit Nakornthap 大臣補佐官は、大学が国からの独立を維持するためには社会に対する説明責任を果たさなければならないと述べた。

市場の需要とのミスマッチが原因で、卒業生が自分の学んだ専攻と関連する分野で就職できない現状は問題である。その一つの例として、1 年に必要な小中高等学校の教師が 2,000 人であるのに対して、現在は 1 万人以上の教師希望者がおり、教育分野を専攻した大卒者の多くが就職先を探している。

Krissanapong 副教育大臣は、学生は年間 10 万バートの授業料を払い、大学は国民の税金から何 10 億バートの予算を得ており、社会に対して説明責任を果たさなければならないと述べた。少なくとも詳細なコース内容や卒業生の就職率を公開し、入学前の学生がコース選択の際に参照できるようにしなければならない。

職業教育局も職業学校の卒業生に対して就職を保証し、職業教育学校へ進学する学生が増えるよう努めなければならない。現在、タイでは中級の技術を持つ人材の需要が非常に高い。

学生の保護者も子供が職業学校に進学することを推奨すべきだ。タイの経済発展は大学卒業生ではなく、実社会で役立つ技術を身につけた人材によって牽引されている。現在の職業学校では市場の需要を満たす人数と質を持った卒業生を輩出できていないことが懸念される。

(10 月 27 日 Bangkok Post 紙)

■大学省の設立、大学長委員会で承認

タイの大学長委員会 (THE Council of University Presidents of Thailand (CUPT)) は高等教育局を教育省から独立し省に格上げすることを承認したと CUPT 議長の Pradit Wannarat 准教授が発表した。新しく設立される省は 21 番目の省となり、暫定的に大学省、または大学及び研究省と呼ばれる。

同省は今後、タイ研究財団 (Thailand Research Fund) 及びタイ学術研究会議 (National Research Council of Thailand) も所管し研究開発が大学運営とともに重要政策の一つとなることが予想される。

Pradit 議長によるとこの案は Narong Pipatanasai 教育大臣より提案された。

CUPT 事務局長の Kamthorn Tatiyakawi 准教授は新設される省は大学の柔軟な組織改革と発展に非常に重要だと述べた。法案は今後 2 ヶ月で起案され、議会に提出される予定だ。

(10 月 27 日 Bangkok Post 紙)

■ ミャンマー教育基本法に対する学生の反対運動

ミャンマーの大学生は、教育基本法を見直さなければ同法への反対運動を全国で展開すると政府をけん制している。これは、同法が学生の政治活動への関与を禁止し学問の自由を制限しているためである。学生は逮捕するという脅迫を恐れずヤンゴンに集結し政府に対して 60 日以内に彼らの要求に応えるよう要望した、と学生連合の総書記を務める Phyo Phyo Aung 氏は語った。学生たちはこぶしを突き上げ、抵抗のシンボルである戦う孔雀を描いたバナーを掲げてヤンゴンの町を練り歩いた。

ミャンマーは、2011 年に軍事政権から文民から選ばれた Thein Sein 大統領に政権がうつり、現在は政治改革に取り組んでいる。しかし専門家の見解では、依然として授業の内容が政府に厳しくコントロールされており、その教育内容は政治活動が禁止されていた独裁政権時代を思い起こさせるものであるという。

この反対運動を受け、教育省は国の発行する新聞で、学問の自由と学生団体結成の容認を付帯規則の中に盛り込む可能性がある」と発表した。

9 月に議会を通過した教育法では、教育政策やカリキュラムの内容は政府関係者で構成される委員会に決定権が委ねられている。同教育法は、学生の団体結成を禁止しているほか、少数民族から、同民族の居住する地域にある学校では民族の言語を使用した授業の実施が求められているが、これも盛り込まれていない。

Phyo Phyo Aung 氏は、政府は学生・教師・研究者の意見を聞かずに教育法を草案し、教育政策やカリキュラムが政府関係者で構成された委員会で決められるのは不合理であると主張している。

ミャンマーの教育制度はかつてアジアで最も素晴らしいと評されていたが、軍事政権により大学は社会不満の温床とみなされ閉鎖されていた。1988 年に軍部によって弾圧された民主化運動の中心は大学生だったため、反対運動の拡大にミャンマー政府は神経を尖らせている。

(11 月 18 日 Bangkok Post 紙)

■ 地理情報・宇宙技術開発分野における ASEAN 連携

Geoinfotech 2014 の一環として開催された地理情報・宇宙技術開発分野における ASEAN 諸国の連携促進をテーマにしたセミナーで、タイ地理情報・宇宙技術開発機関 (Geo-Informatics and Space Technology Development Agency (GISTDA)) の Vichit Satharanond 理事は、ASEAN 諸国はこれまでそれぞれの国でサテライト画像技術に投資してきたが、今後は ASEAN 諸国間での連携を進め情報基盤技術分野の開発を効率的に行わなければならないと述べた。ASEAN 諸国内でのサテライト画像の共有は、気候変動による影響を受けやすい ASEAN 諸国の自然災害対策にも活かすことができる。さらに、ASEAN+3 カ国にも連携が広がることが期待される。3 カ国には ASEAN 諸国への投資や技術トレーニング支援を期待している。

科学技術省副事務次官 Somchai Tiamboonpresert 氏は、タイ政府に科学技術情報分野により多くの予算を投入するよう求めた。現在、研究開発費に割り当てられている国家予算は 0.37% で、これを 1% に引き上げるか最低でも 1,000 億バーツの予算を投入するよう求めている。また、不安定な政治状況も研究開発に対する政策に継続性がないため悪影響を与えていると述べた。

TV 制作会社社長の Somkiet Ornwimon 氏も講演の中でこれに同意し、タイは科学技術分野にもっと投資するべきだと述べた。宇宙産業分野を得意とするユーロコンサルト社の調査によると天文学分野への国家予算の投資額はベトナムが 9,300 万 US ドルで域内で最も大きく、ラオスが 5,000 万 US ドル、インドネシアが 3,800 万 US ドル、タイが第 4 位で 2,000 万 US ドルという結果だった。

GISTDA 理事長の Somchet Thinaphong 氏は地理情報及び宇宙工学はタイの交通や農業分野の開発にも役立つと述べた。交通分野ではサテライトを使った国土のマッピングシステムの向上、農業分野では肥料が必要な土地の特定などに活用できる。

(11 月 22 日 Nation 紙)

■第 37 回 SEAMEO 政府高官会議

第 37 回 SEAMEO (東南アジア教育大臣機構) 政府高官会議においてタイ教育省事務次官 Dr. Suthasri Wongsamarn が SEAMEO 理事長に選出された。

就任期間は 2014 年から 2015 年。Dr. Suthasri は副理事であるインドネシア教育文化省事務次官と緊密な連携を図りながら任務に当たることを宣言した。

会議では以下の議題について議論が行われた。

- 1) 東南アジア初等教育基盤プロジェクト (the SEA-PLM project) を活用した SEAMEO とユニセフ東アジア・太平洋地域事務所の協力
- 2) SEAMEO と SEAMEO 共同機関である筑波大学のスーパーグローバル大学創生支援事業における協力
- 3) 2014 年から 2015 年に実施する SEAMEO50 周年記念事業
- 4) 2015 年から 2016 年の間 SEAMEO 理事会議長はタイ教育省事務次官が就任
- 5) 次期インドネシア SEAMEO ディレクター選出
- 6) 東南アジア教育大臣事務次官会議 (SEAMES) 前議長 Dr. Abdul Wichiencharoen に SEAMEO50 周年記念賞の授与
- 7) リージョナルセンターの一つとして SEAMEO 教育リーダーシップセンター (SEAMEO RELEAD) 設立
- 8) 第 48 回 SEAMEO 会議は 2015 年タイで開催
- 9) 第 5 回基礎教育に関する SEAMEO 高官会議及び関係機関会議は 2015 年カンボジアで開催

(11 月 28 日 タイ教育省)

■第 8 回 AIMS プログラム会議

第 8 回 AIMS プログラム (ASEAN International Mobility for Students Programme) レビューミーティングが開催され、高等教育局事務局長及び東南アジア教育大臣機構・高等教育開発センター (SEAMEO RIHED) 理事長 Kamjorn Tatiyakawee 准教授が出席した。同レビューミーティングは AIMS プロジェクトの成果を評価し、統計データの共有や課題の解決、運営方法見直しを目的として実施されている。

会議には AIMS プログラムメンバーであるマレーシア、インドネシア、ブルネイ、フィリピン、ベトナム、日本、タイの高等教育機関代表者が参加した。

会議では以下の事項について合意された。

- ・新たに 1) 環境科学、2) 生物多様性、3) 海洋科学を交流対象学問分野として追加する。
- ・各大学は複数の学問分野で交流を行うことを推奨する。
- ・東南アジア教育大臣機構・高等教育開発センター (SEAMEO RIHED) が国際プログラムコーディネーターセンターとして機能し、学生交流プロジェクトの質の向上と AIMS プログラム参加大学に設置された国際連携オフィス (International Relations Office (IROs)) の運営評価を行うことを期待する。

第 9 回レビューミーティングは 2015 年に日本で、第 10 回は 2016 年にマレーシアで開催予定。

(12 月 17 日 タイ教育省)

■ ASEAN 経済統合に備えた教育改革

タマサート大学 Somkit Lertpaithoon 学長は、同大学 ASEAN フォーラムにて、タイの学生が 2015 年 ASEAN 経済統合に向けて ASEAN 情勢を学ぶ必要性を述べた。

タマサート大学は ASEAN について学ぶ科目を開設し全ての学生に必修とする予定だ。また、ASEAN 域内の大学との覚書締結を進め、様々な連携をしていく予定だ。特に ASEAN のトップ 3 大学と研究交流や学生交換プログラムのための覚書締結を検討している。

タイ外務省 ASEAN 局副事務局長は、学生は ASEAN 公用語である英語に加えて域内諸国の言語も習得すべきであると述べ、大学も学生に ASEAN 諸国の言語を学ぶことを推奨するよう求めた。

タイ人学生の ASEAN 諸国の言語や英語の習得率は他国と比較して非常に低く、これは ASEAN 経済統合が実現する際にタイが直面する問題だと懸念されている。

(12 月 18 日 Bangkok Post 紙)

日本学術振興会バンコク研究連絡センター アクセス&コンタクト

アクセス

高架鉄道 (BTS) Asoke 駅、1 番出口から徒歩 5 分
地下鉄 (MRT) Sukhumvit 駅、1 番出口から徒歩 5 分

コンタクト

1016/1, 10th floor, Serm-mit Tower, 159
Sukhumvit Soi 21, Bangkok 10110, Thailand
Tel +66-2-661-6533 Fax +66-2-661-6535
Website: <http://jsps-th.org> Email: jspsbkk@jsps-th.org
facebook: JSPSBangkok



■ 表紙写真紹介



Wat Nong Wang Muang (ワット・ノーン・ワンムアン)
タイ・コンケン県のケーン・ナコーン湖の南端に建つノーン・ワンムアン寺にある仏塔 (チェディ) です。9 階建てになっており中にはコンケン県の歴史を書いた壁画などが飾られています。(参照「ロンリープラネット・タイ」)
コンケン大学で開催した JSPS 事業説明会の際に立ち寄りしました。
11 月の青空に黄金のチェディが輝いていて、この写真を撮るのもまぶしいくらいでした。

■ 新スタッフ紹介

9 月よりバンコクセンターの新たなリエゾン・オフィサーとして Natthida Veeramongkornkun さん (ニックネームは Bom さん) がバンコクセンターの一員となりました。英語、日本語ができることはもちろん、JSPS 事業説明会では急遽、司会も務めてくれるなど、臨機応変に幅広い仕事に対応してくれています。Bom さんが日本とタイの文化や社会制度の違いを理解し両国の架け橋となってくれているおかげで、JSPS のカウンターパートである NRCT やタイの大学、JSPS タイ同窓会の先生方とバンコクセンターがよい関係を築くことができている一面もあります。今後とも Bom さんをどうぞよろしくお願いいたします。



【JSPS 事業説明会で司会を務める Bom さん】

■ 編集後記

今回の「バンコクの風」では、日本大使館・俵幸嗣一等書記官にタイの高校のサイエンス・スクール設置の取り組みについてご寄稿いただきました。お忙しい中、貴重なお時間を割いて当ニュースレターのために執筆いただきましたことをこの場を借りてお礼申し上げます。

俵さんの寄稿の中で、チュラポーン・サイエンス・スクールの生徒が、いろいろなプロジェクトを通して日本の文化や教育・科学技術に親しんでいることが紹介されていました。

このような取り組みが下地となり、将来、日本の大学へ留学や日本で研究したいと希望する学生が育っていくことが期待されます。そのような大きな期待を持って来日するタイ人学生や研究者を、日本の大学や地域で温かく受け入れていければと思います。

(バンコクセンター国際協力員 轟 裕美)